

日本語名詞の接頭辞化
—程度の強調を表す語を中心に—
**Prefixes Altered from Japanese Nouns:
Focusing on the Emphasis Function of Degree**

柴田 龍希
SHIBATA Ryuki

In this paper, we analyze the phenomenon of Japanese nouns changing their meaning and becoming prefixes, focusing on the word “KUSO” and its synonyms.

Prior to the analysis, we surveyed previous studies on Japanese prefixes and defined two original terms, “functional prefix” and “lexical prefix” to clearly explain Japanese prefixes. We analyzed the usage of the word “KUSO” using the two terms defined above. The results indicated that the word “KUSO” can be used as a noun and prefix, which is clarified through expansion by rhetoric. Additionally, we clarified the usage of the word “BAKA”, “GOMI” and “KASU” which are the synonyms of “KUSO” indicated same expansion as “KUSO.”

Furthermore, we demonstrate that Japanese nouns, lexical prefixes, and functional prefixes are in a continuous relationship.

キーワード：意味論 接頭辞 文法化

key-words : semantics, prefix, grammaticalization

1. はじめに

本研究では、日本語の名詞が意味を変化させて接頭辞になる現象を取り上げて分析する。

- (1) a. 「ちっ、謝るもクソもねえよ。生意気なアマだぜ。高校生かよ」
(上原瑛『黒の葬列』新風舎 2004)¹
- b. チロルチョコのきなこ味くそ美味い
(<https://twitter.com/As3122haruu/status/1083032855968530432> 2019 2019/01/10 参照)
- (2) a. 朝日連峰には二食付きの山小屋はない。それなのにナベやラジュースを持たずに入山する馬鹿がいるだろうか。
(太田蘭三『殺意の三面峡谷』祥伝社 1999)
- b. 「奴を追い出せ！」警官の声に若い男は全力で扉を押したが、相手は物ともせず押し返してくる。「何て馬鹿力を出しやがるんだ…」
(ジェイムズ・ガン(著)/人間眞(訳)『死者の夜明け』竹書房 2004)

(1a)の「クソ」は〈好ましくない人や物事〉という意味を表している。対して、(1b)の「く

そ(美味しい)は(1a)の「クソ」と異なり、〈程度がはなはだしい〉という意味を表している。(1b)の「くそ」を用いた他の例として、「くそ度胸」「くそかっこいい」などが挙げられる。また、(2a)の「馬鹿」は〈愚かな人や物事〉という意味を表している。対して、(2b)の「馬鹿(力)」は(2a)の「馬鹿」と異なり、〈程度がはなはだしい〉という意味を表している。(2b)の「馬鹿」を用いた他の例として、「馬鹿当たり」「馬鹿値」などが挙げられる。

これらの用法を比較すると、(1a)、(2a)の「クソ」「馬鹿」はそれぞれ文中で名詞として使われている。一方で(1b)、(2b)の「くそ」「馬鹿」は、後接する語の意味の程度の大きさを強調する働きをしており、自立した語として機能していない。また本来「くそ」や「馬鹿」は人や物事などを罵倒するマイナスのニュアンスを表す語であるのに対して、(1b)、(2b)のような用法では両語ともプラス・マイナスに関わらず使われている。このように日本語の名詞には、他の語と結びついたときに、単独で名詞として働いていたときと異なる意味を表す場合がある。

この現象について、靱山(2014)は以下のように「丸」の用例を挙げて、「文法化」の1つであると説明している。

(3) a. 先生が黒板に大きな丸を書いた。

b. 今度の試験は、プリントを丸暗記しておけば何とかなるだろう。

(靱山(2014 : 58))

靱山(2014)は、(3a)の「丸」は名詞であり、〈円〉という意味を表している一方で、(3b)の「丸」は〈すっかり・全部〉という強調の意味を表す接辞(接頭辞)であると述べている。そして、このように本来内容語であったものが、機能語・機能形態素としての働きを持つようになる現象のことを「文法化」と述べている。この「丸」は、名詞から接頭辞への文法化の一例として説明されている。また(3)の類例として、(2)と同様の「馬鹿」の用例を挙げている。加えて、接頭辞になった「丸」「馬鹿」の用例として以下の語を挙げている。

(4) 「丸～」という合成語

丸暗記、丸焼き、丸見え、丸洗い、丸写し、丸呑み、丸齧り、丸儲け、丸損、丸潰れ、丸抱え、丸出し、丸裸

(5) 「馬鹿～」という合成語

a. 好ましくない意味：馬鹿正直、馬鹿ていねい、馬鹿高い、馬鹿騒ぎ、馬鹿笑い

b. その他：馬鹿当たり、馬鹿売れ、馬鹿でかい、馬鹿力

(靱山(2014 : 60))

本研究では(1)で挙げた「くそ」について、靱山(2014)に倣って名詞から接頭辞になった文法

化現象であると捉え、意味と用法を分析する。そして、日本語の名詞が他の語と結びついたときに、単独で名詞として働いていたときと異なる意味を表すことがある現象について考察していく。

2. 日本語の接頭辞について

本研究では前章で挙げたように、名詞として用いる場合と接頭辞として用いる場合とで意味が異なる語について分析する。そのために本章ではまず、日本語における「接頭辞」がどのようなものであるかを確認し、本研究における「接頭辞」について定義する。

2.1. 従来の日本語接頭辞の研究について

日本語において「接頭辞」は、辞書や研究ごとに異なる定義がなされており、解釈に揺れが見られる。

まず『日本国語大辞典』を見ると、「接辞」について次のように定義されている。

語構成要素の一つ。みずからは単独に用いられず、常に他の語（語基）に添加され、それと一続きに発音されて、一語を構成する要素。語基の前に加わるものを接頭語、後に加わるものを接尾語、中間に挿入されるものを接中辞または内接辞と呼ぶ。…(中略)…派生に当たって、もとの単語に意義上の修飾を加えるだけのものと、意義を加えるとともに新たに別の品詞の資格を与えるものがある。日本語では、接頭語は前者に属し、接尾語はその両者を含んでいる。

（『日本国語大辞典』）

この記述は、「接辞」が単独で語にならない形態素(拘束形態素²⁾であると述べている。

一方で『言語学大辞典』『明解言語学辞典』で「接辞」は、次のように定義されている。

屈折にせよ、派生にせよ、語が主要な部分と補助的な部分からなる構造をもつとき、その主要な部分を語幹といい、その語幹に付いてそれを補助する要素を接辞という。概していえば、語幹はその実質的な、語彙的な意味を担い、これに対して、接辞はその語の形式的な、文法的な意味を分担するといえよう。

（『言語学大辞典』）

接辞とは、複数の形態素から構成される語について、文法的な機能を担っている形態素のことを指す。これに対して、語彙的な内容を表現する形態素は語基という。語基の前に出現する接辞を接頭辞という。…(中略)…接辞は常に拘束形態素である。

（『明解言語学辞典』）

これらの記述では「接辞」が拘束形態素であることに加えて、語彙的な意味を持たず、文法的な機能を表すことを述べている。そして『言語学大辞典』では日本語の「接頭辞」の例として、尊敬・丁寧を表す「オ-」(ex.御手紙)や、強度を示す「マッ-」(ex.真っ黒、真っ最中)が挙げられている。

しかし日本語には、語基に前接する形態素のなかで、拘束形態素でありながら語彙的な意味を表すものが多数存在し、それらは「接頭辞」として研究されている。例えば竝木(2009)では、文中で単独で現れることができない分割不可能で意味を持った最小の要素のうち、他の単語に前接する要素を「接頭辞」と定義し、日本語の接頭辞の例として以下のようなものを挙げている。

- (6) a. 片- : 片手、片足
- b. 同- : 同時代、同世代
- c. 前- : 前首相、前大統領
- d. 未- : 未成年、未完成
- e. 小- : 小高い、小粋な

これらの形態素は単独で使用されることがないので、拘束形態素であると考えられる。しかし、これらは先に見た「オ-」「マッ-」と比べると、後接する語に付加する意味について違いが見られる。例えば、尊敬・丁寧を表す「オ-」を使った「御手紙」や「お父さん」といった語は、「オ-」を取り除いて「手紙」「父さん」としても、尊敬・丁寧のニュアンスは無くなるが指示対象は変わらない。一方で「片-」を使った「片手」「片足」といった語は、「片-」を取り除いて「手」「足」とすると、指示対象が変わってしまう。このような点から、竝木(2009)が挙げている形態素が示す意味は、先の「オ-」や「マッ-」と比べて少なからず語彙的であり、文法的機能の範疇であるとは言い難い。これらは『言語学大辞典』や『明解言語学辞典』が定める「接辞」は拘束形態素であり、語彙的な意味を示さず、文法的な機能を持つものである」という定義に反する例である。

さらに、単独として用いられるもの、つまり拘束形態素ではない形態素が「接頭辞」と分類されているケースも見られる。『日本国語大辞典』では、「悪(あく)」について、名詞として「(道徳、正義、法などに反することをいう) わるいこと、よこしまなこと。また、そういう行為、ふるまいをさす」、接頭辞として「道徳、正義、法などにそむくことを表わす」と分けて記述されているが、これらの意味に大きな差はないように見える。このように、単独で語として扱う用法とほとんど変わらない意味を示す用法が「接頭辞」として分類されている場合がある。このような例は、『日本国語大辞典』『言語学大辞典』『明解言語学辞典』が定める「接辞」は拘

束形態素である」という定義に当てはまらない。

また『日本語文法事典』では、「単独で語を構成することができず、語基と結合して形式的な意味を添えたり語の品詞を決定したりする要素」を「接辞」と定義した上で、接辞と語基の相違は程度的であり、両者が常に明確に区別されるものではないということを、「取り出す」「取り戻す」「取り決める」「取り乱す」などの例を挙げて主張している。

このように、日本語の「接頭辞」の定義は以下の2点で揺れているといえる。

- A. 拘束形態素である。
- B. 語彙的な意味を持たず、文法的な機能を表す。

次節では、この2点に言及しながら本研究における接頭辞の定義を定める。

2.2. 本研究における接頭辞の定義について

本研究では「接頭辞」について、以下のように定める。

・ 接頭辞

語基に前接し、それ単独では語として扱えないもの。

この定義は、前節で挙げた2つの「接頭辞」の要素のうち、「A.拘束形態素である」を用いたものである。本研究ではこれを「接頭辞」と判断する基準とする。

さらにもう1つの要素「B.語彙的な意味を持たず、文法的な意味を表す」を用いて、以下の2つの術語を定義して「接頭辞」の下位分類³とする。

・ 形式接頭辞

接頭辞のなかで、強度を示したり音調を整えたりするなど文法的な働きを示し、語彙の意味を持たないものを指す。『言語学大辞典』が「接頭辞」の例として挙げている尊敬・丁寧を表す「オ-」や強度を示す「マッ-」を典型的なものとする。

- (7) 春休みに、夏休みに、冬休みに、おとうさん、おかあさんにつれられて、サーブに会いにくるお友だちが、毎日まいにち、何組もいました。

(手島悠介『天国へいったサーブ』講談社 1988)

- (8) 彼は双眼鏡の視野に浮かび上がっている目盛りを用いてほぼ真正面を向いている敵先頭車の幅とミル数を測り、幅をミル数で割って距離をもとめた。

(佐藤大輔『レッドサンブラッククロス』徳間書店 1995)

(7)の「オ-」や(8)の「マ(ッ)-」は、「B.語彙的な意味を持たず、文法的な意味を表す」を「接頭辞」の定義に含んでいる『言語学大辞典』にて、典型例として挙げられていたものである。本研究では、この「オ-」と「マ(ッ)-」を形式接頭辞の典型例として扱う。また、以下のような例も形式接頭辞に含める。

(9) 「涙を抱いた渡り鳥」以上に、負けないド根性や、人が生きていくための気概とか気構えが見事に歌われている。

(山口敬司『夢追い人生』海鳥社 2002)

(10) アツツ島玉砕が伝えられる中、「下村は捕虜と遊んでばかりいる」と、上官から嫌というほどぶん殴られた姿を彼らはしっかり見ていた。

(富澤慶秀『「東京漫才」列伝』東京新聞出版局 2002)

(9)の「ド-」と(10)の「ぶん-」は両方とも単独で語として用いられない拘束形態素である。また、(9)の「ド根性」は、『明鏡国語辞典』にて「根性を強めていう語」と意味記述されている。つまり「ド-」は、後接する名詞「根性」の強さを強調する働きを持っている。同様に(10)の「ぶん殴る」は『明鏡国語辞典』では「強く殴る。力いっぱい殴る」と意味記述されており、この「ぶん-」は後接する動詞「殴る」の程度の大きさを強調する働きを持っている。

ここで挙げた「ド根性」「ぶん殴る」は、それぞれ「ド-」「ぶん-」を取り除いて「根性」「殴る」としても指示対象は変わらない。⁴よってこの「ド-」や「ぶん-」は、先の「オ-」「マッ-」と同様に、語彙的な意味を示さないと考えられる。そのため、文法的機能を示す形態素であると判断ができる。

このように、先に挙げた2つの「接頭辞」の要素のうち、AとB両方を満たすものを「形式接頭辞」と定義する。

・ 語彙接頭辞

接頭辞のなかで、語彙的な意味を持っているものを指す。以下に例を挙げる。

(11) ハゲ=エロといった悪い印象より、むしろ、頭がいいという好印象を抱く。たぶん、毛沢東のイメージからなのだろう。

(山岡俊介『ぼくの嫁さんは異星人』双葉社 2001)

(12) ご存じのとおり、アメリカでは草野球から発展して大人のスポーツとなり、すぐにプロへと発展したが、日本では違った。

(佐山和夫『松井秀喜の「大リーグ革命」』講談社 2003)

(11)の「好-」は単独で語として用いられない拘束形態素である。「好印象」は「好ましい印象」という意味を表しており、よって「好-」は後接する名詞に〈好ましい〉という意味を付加しているといえる。(12)の「草野球」は『明鏡国語辞典』にて「素人が集まり、楽しみとする野球」と意味記述されている。つまり「草-」は後接する名詞に〈素人の〉という意味を付加しているといえる。通常、「草」は名詞であり、単独で語として扱われるが、この〈素人の〉という意味を表す場合、単独で語として用いられない。よって(12)の「草-」も拘束形態素であると考えられる。

ここで挙げた「好印象」「草野球」は、それぞれ「好-」「草-」を取り除いて「印象」「野球」とすると、先に挙げた「片-」の例と同様に、指示対象が変わってしまう。よって「好-」の〈好ましい〉という意味や、「草-」の〈素人の〉という意味は少なからず語彙的であると考えられる。

このように、先に挙げた2つの「接頭辞」の要素のうち、Aのみを満たすものを「語彙接頭辞」と定義する。

以上を本研究での接頭辞と定義する。⁵なお、ここで定めた接頭辞とは異なり、単独で語となる語基が別の語基に前接した場合を、本研究では接頭辞と区別して、複合語の前項要素(以下、前項要素)と呼ぶ。以下にその例を挙げる。

(13) ボクは最晩年と、今回切り絵に切った、ビートルズのごく初期の顔が好き。長髪と髭と丸眼鏡の時は、なんだか自分でそういう風に作ってるみたいで、今見ると理屈っぽそうに見えて、あまり好きじゃない。

(久住昌之/五條瑛『小説推理』双葉社 2004)

(14) 宇佐美はけさ、ともだちの自殺のせいで病気みたいだったのに、草人形に特別な魔力があるみたいに、すっかりふつうになっている。

(杉村暎子『パストラル』講談社 1994)

(13)の「丸眼鏡」は丸いフレームの眼鏡を指していて、この「丸-」は、名詞「丸」と同じ〈円〉という意味を表している。(14)の「草人形」は草で作られた人形のことであり、この「草-」は名詞「草」と同じく〈植物で、茎の部分が柔らかく、木質にならないもの〉を指している。ここで挙げた「丸-」「草-」は先に挙げた接頭辞とは異なり、単独で名詞として成り立つ語基が、別の語基に前接しているものである。本研究ではこのように単独で語となる語基が別の語基に前接したものを前項要素と呼び、名詞用法の一種として扱い、接頭辞と区別する。

以上、本章では日本語の接頭辞について概観し、本研究における接頭辞、形式接頭辞、語彙接頭辞、前項要素についてそれぞれ定義した。

3. 「くそ」の分析

本章では、第1章で挙げた「くそ」について、具体例を観察し、前章で定めた用語を用いて分析していく。

3.1. 「くそ」の名詞用法

「くそ」は主に名詞として、以下に挙げる用例のように使われている。

意味1: 〈大便〉

(15) 「その兵はとっさに自分のクソをつかんで敵に投げたんです。顔に命中したらしい。びっくりして敵は逃げたそうです」

(阿部牧郎『小説NON』祥伝社 2002)

(16) そのような脅迫と、使用者が妥協するから、極道どもが、糞桶のボウフラのごとく湧満するのだ。

(三角寛『三角寛サンカ選集』現代書館 2005)

(15)は兵士が自らの排泄物を敵に向かって投げたことが述べられている。この「クソ」は〈大便〉という意味を表している。この意味は、(16)のように「くそ」が語基に前接する形式でも見られる。(16)の「糞桶」は大便を溜める桶のことであり、この「糞-」は(15)と同じ〈大便〉という意味を後接する名詞「桶」に付加している。よってこの(16)の「糞-」は前項要素であり、名詞用法の一種である。

意味2: 〈好ましくない人や物事〉

(17) それじゃ、俺も待ってる、死に損いのクソが。ビビって、来ねえと、このガキの喉首を掻き切ってやるぜ。

(朝松健『夜の果ての街』光文社 1999)

(18) 昔のゴジラは、そのまま「ゴジラ映画」だった。最近のは一部のヲタク向けの特撮ヒーロー物の延長でしかないクソ映画に成り果てたのでつまらなくなった。

(『Yahoo!知恵袋』2005)

(17)では、この発話者が語りかけている対象である人を「死に損ないのクソ」と呼んでいる。この「クソ」は〈好ましくない人や物事〉という意味を表している。この意味は、(18)のように「くそ」が語基に前接する形式でも見られる。(18)の「クソ映画」は〈くだらない映画〉という意味で用いられており、この「クソ-」は(17)と同じ〈好ましくない人や物事〉という意味

を後接する名詞「映画」に付加している。よってこの(18)の「くそ-」は前項要素であり、名詞用法の一種といえる。

このように名詞用法の「くそ」は、〈大便〉〈好ましくない人や物事〉という意味で用いられている。

3.2. 「くそ」の接頭辞用法

語基に前接する「くそ-」には、以下のように先の名詞用法とは異なる意味を表す場合がある。

意味3：〈程度がはなはだしく、好ましくない〉

(19) くそ真面目にNOK受信料を現在の料金で十年払うと幾らになるんですか？NOKなどと書かずに、ハッキリとNHK書いた方がいいですよ！因みに私は今回の問題以前から払っていません。何故ならば、払っている人も払ってない人も同じように見られるシステム自体が間違っていると思うからです。

(『Yahoo!知恵袋』2005)

(20) 私としては、こんなクソ早い授業をおとして来年もまたとるのはたまらぬから、懸命にしようとするのであるが、(後略)

(中島梓『マンガ青春記』集英社 1989)

(19)では、お金を払っても払わなくても同じような扱いをする団体に対して、律義にお金を払うことを「くそ真面目」と表現して、それは報われない無駄な真面目さ、言い換えれば一般より過度で、発話者が有意ではないと感じるほど「真面目」であることを表している。この「くそ-」は先の名詞用法で示していた意味とは異なり、後接する「真面目」に〈愚直なほど〉という意味を付加している。また(20)では、開始時間が早い授業について「クソ早い」と表すことで、発話者にとって開始時間は過度に早く、発話者がそれを好ましく思っていないことを表している。この「クソ-」も名詞用法とは異なり、後接する形容詞「早い」に〈程度がはなはだしく、好ましくない〉という意味を付加している。よってこれら(19)(20)の「くそ-」は、後接する語に〈程度がはなはだしく、好ましくない〉という意味を付加しているといえる。

ここで確認した「くそ-」の〈程度がはなはだしく、好ましくない〉という意味は、名詞用法の「くそ」では確認できない。よってこの「くそ-」は拘束形態素であるといえる。さらに、ここで挙げた(19)(20)の文において、「くそ(クソ-)」を取り除くと、発話者が好ましく感じていないという意味合いがなくなり、文意が大きく変化してしまう。つまり、この用法の「くそ-」は少なからず語彙的な意味を持っているといえる。

以上から、「くそ-」には名詞用法と異なる〈程度がはなはだしく、好ましくない〉という意味を表す用法があり、この用法は語彙接頭辞として働いている。

さらに、ここまで確認した2つの「くそ」とは異なる用法で用いられている「くそ-」がある。

意味4：〈程度がはなはだしい〉

(21) チロルチョコのきなこ味くそ美味い!

(=(1b))

(22) そんな誰にでも抑えができるほどクローザーは簡単じゃないと思う。前にも言ったけど、くそ度胸、太々しさ、強靱なメンタルがないと…簡単にその時だけ調子のいい投手に変えたら1歩間違えたら選手を潰してしまうのに…

(https://twitter.com/hawks_suito/status/1028200748327161856 2018 2019/01/10 参照)

(21) では、とてもおいしいお菓子の味について「くそ美味い」と表現している。この「くそ-」は先に確認した「くそ-」と同様に、後接する語の程度のはなはだしさを強調する働きをしているが、先の用法と異なりマイナスのニュアンスを含んでいない。また(22)では、野球にてゲームの終盤に登板する投手である「クローザー」に必要な並外れた度胸について「くそ度胸」と表現している。この「くそ-」も後接する名詞「度胸」のはなはだしさを表しているものだが、(21)と同じく好ましくないというニュアンスを持っていない。この「くそ-」の用法、特に(21)のような形容詞に前接する表現は、比較的新規の表現であり、定着した表現とは言い難いが、SNSを中心に十分な数の用例を確認することができる。

さらに、ここで挙げた「くそ美味しい」「くそ度胸」という語は、「くそ-」を取り除いても、程度の違いはあるものの、指示対象は変わらず、それぞれ「美味しい」「度胸」に替えても文意はさほど変わらない。⁶つまりこの「くそ-」は、語彙的な意味を持っていないといえる。またこの「くそ-」の意味は、強度に言及するという点で、第2章で形式接頭辞の典型例として挙げた接頭辞の「マッ-」に近い。

よって「くそ-」は、これまで挙げた名詞用法の「くそ」や語彙接頭辞用法の「くそ-」と異なる〈程度がはなはだしい〉という意味を表す用法があり、この用法は形式接頭辞として働いている。

3.3. 「くそ」の用法のまとめ

本研究にて明らかにした「くそ」の用法は以下のとおりである。

・名詞用法

意味1：〈大便〉

意味2：〈好ましくない人や物事〉

・語彙接頭辞用法

意味 3：〈程度がはなはだしく、好ましくない〉

・形式接頭辞用法

意味 4：〈程度がはなはだしい〉

ここまで名詞用法の「くそ」と接頭辞用法の「くそ-」の意味を扱ったが、両者には比喻による関係性が見出せる。

まず名詞用法において、意味 1 〈大便〉は、人間にとって汚いものであり、好ましくないものである。よって意味 2 〈好ましくない人や物事〉と比較すると、意味 2 は意味 1 から、好ましくないという類似性を見出したメタファー⁷によって拡張した意味であると考えられる。

さらに語彙接頭辞用法の意味 3 〈程度がはなはだしく、好ましくない〉という意味は、不愉快なほどに度が過ぎているさまについて、同じように不愉快さを感じられるという点で意味 2 〈好ましくない人や物事〉と類似性を見出したメタファーによって拡張したものであるといえる。

また、形式接頭辞用法の意味 4 〈程度がはなはだしい〉については、語彙接頭辞用法の意味 3 〈程度がはなはだしく、好ましくない〉が何度も使用されるうちに指示対象が広がり、好ましくない場面以外にも使われるようになったものだと推測できる。つまり意味 4 〈程度がはなはだしい〉という意味は、意味 3 〈程度がはなはだしく、好ましくない〉が何度も使用されて定着するにつれて、シネクドキー⁸によって拡張したものであるといえる。

このように、「くそ」が持つ 4 つの意味には、比喻による拡張関係を見出すことができる。

4. 接頭辞「くそ」と類似している例

ここまで「くそ」の意味・用法について分析してきた。ここでは、「くそ」と同様に人や物事についてマイナスのニュアンスを表す語の例を見ていく。まずは第 1 章でも挙げた「馬鹿」である。

意味 1 〈愚かな人や物事〉

(23) 「金魚はよく糞をくっつけたまま泳いでいるだろう。おまえはあれと同じだ」「馬鹿を言うな。あんたが俺の前を走っているだけだ」

(斎藤純『銀輪の覇者』早川書房 2004)

(23)の「馬鹿」は〈愚かな人や物事〉という意味を表す名詞用法である。この「馬鹿」の意味 1 は、人や物事にマイナスのニュアンスを示すという点で「くそ」の意味 2 と類似している。

意味 2 〈程度がはなはだしく愚かである〉

(24) 正史とは国家の歴史の正式な記録である。にも拘らず、このような痴戯の類まで馬鹿正直に記載しているのである。そんな史官の執筆態度に筆者も好意を覚えざるを得ない。

(酒見賢一『後宮小説』新潮社 1989)

(24)では国家の歴史について、わざわざ残さなくてもいいような痴戯の類まで「正直に」正確な記録をつけた史官について「馬鹿正直」と評している。この「馬鹿-」は単独で語としては用いられず、後接する「正直」を強調する働きをしつつ、書かなくてもいいことをわざわざ残したことを揶揄するニュアンスを付加している。この「馬鹿」の意味 2 は接頭辞用法であり、マイナスのニュアンスを示しながら後接する語を強調するという点で、「くそ」の意味 3 と類似している。

意味 3 〈程度がはなはだしい〉

(25) ドルトムント馬鹿強いじゃん、ユナイテッドがまさにやりたいサッカー

(<https://twitter.com/Kota116140081/status/1061333803556204544> 2018 2018/11/15 参照)

(25)では、ドイツのサッカーチームのボルシア・ドルトムントが、同じくドイツの強豪サッカーチームであるバイエルン・ミュンヘンに 3-2 で勝利した試合を見た感想である。「ユナイテッド」はイングランドの強豪サッカーチームであるマンチェスター・ユナイテッドを指しており、(25)は、ドルトムントのプレイが他の国の強豪チームが手本にすべきであると感じられるほど良かったことを表している。この「馬鹿-」は(24)と同様に、後接する語に〈程度がはなはだしい〉という意味を付加している接頭辞用法であるが、マイナスのニュアンスは付加していないという点で(24)とは異なる用法である。この「馬鹿」の意味 3 は、後接する語を強調する働きを持っているという点で「くそ」の意味 4 と類似している。

このように、「馬鹿」の用法・意味はそれぞれ、前章で明らかにした「くそ」の名詞用法、接頭辞用法と類似していることがわかる。人や物事にマイナスのニュアンスを示す名詞用法を持っている両語が、プラス・マイナスのニュアンス関係なく後接する語の程度を強調する接頭辞用法へ、揃って用法を拡張させていることがわかる。

また別の語の例として、「カス」「ゴミ」の用例を以下に挙げる。

(26) 回答した奴もしたやつだが、それにベストアンサーをつける奴もつける奴だ。どちらも、ボケ、カスだと思いますがどうでしょうか。

(『Yahoo!知恵袋』2005)

(27) 受験者の殆んどは底なし沼に放りこんでやりたいようなゴミだが、まあ中には何人かまと

ものもいたなと彼は言った。

(村上春樹『ノルウェイの森』講談社 1987)

(28) 菅田将暉の ma-1 姿の余韻から抜け出せない。あの役本当カスかっこいいなあ

(<https://twitter.com/39Onepiece/status/570953775994679296> 2015 2019/01/10 参照)

(29) 実際ミサイルと下サブ当て方分かればアリオスもゴミ強い

(<https://twitter.com/chireidenn/status/578381671956750336> 2015 2019/01/10 参照)

「カス」や「ゴミ」は(26)(27)のように、名詞用法にて〈好ましくない人や物事〉という意味を表す。これは「くそ」の意味 2 や「馬鹿」の意味 1 と類似している。対して(28)では、俳優が演じる役のかっこよさを「カスカッコいい」と表現している。この「カス-」は後接する「かっこいい」の程度を強調する働きを担っている。(29)では、ゲームにおける強いキャラについて「ゴミ強い」と表現している。この「ゴミ-」も(28)の「カス-」同様に、後接する語「強い」の程度を強調する働きを持っている。これら「カス-」「ゴミ-」の用例は主に SNS 上で見られる。まだ用例がそれほど確認できず、接続できる語の種類も少なく語の生産性も低いため、定着している表現とは言い難いが、後接する語を強調するという点で、先に見た「くそ-」「馬鹿-」と類似した接頭辞用法であるといえる。

以上、「くそ」と同様に、名詞用法にて人や物事にマイナスのニュアンスを表す「馬鹿」「カス」「ゴミ」という語の用法について概観した。その結果、これらの語も「くそ」と同様に、名詞用法から拡張した接頭辞用法にて後接する語の程度を強調する機能を持っていることを明らかにした。

5. 文法化の観点からの考察

ここまで「くそ」を中心に、本来名詞である語が接頭辞として用いられている現象について分析してきた。第 1 章で確認したように舛山(2014)ではこの現象を「文法化」の一例として取り上げている。

「文法化」とは、「内容語だったものが、機能語としての性格を持つものに変化する現象」(三宅(2005 : 61))である。内容語とは、名詞や動詞など語彙的な意味を表す語を指しており、機能語とは助詞や助動詞など文法的な機能を担う語を指している。つまり「文法化」とは語彙的な意味を表す語が、文法的な機能を示すようになる現象である。本研究で扱っている、名詞が接頭辞として用いられるようになる現象については、「接頭辞」が機能語に含まれるかは意見が分かれるところではあるが、「語彙的な意味を示す語が文法的な機能を示すようになる」という点では、広義の意味で「文法化」であると判断しても差し支えないと思われる。

ここで、第 2 章で定めた語彙接頭辞と形式接頭辞についてまとめる。

(30) 形式接頭辞：語基に前接する拘束形態素で、文法的な機能を示す形態素

語彙接頭辞：語基に前接する拘束形態素で、語彙的な意味を示す形態素

名詞、形式接頭辞、語彙接頭辞を内容語、機能語の観点からみると、文法的な機能を示すという点で、形式接頭辞は機能語に近い機能を持っている。名詞はもちろん内容語であり、そして語彙接頭辞は両者の中間に位置する要素であることがわかる。名詞、形式接頭辞、語彙接頭辞は、以下のような連続した関係(左に行くほど内容語に近くなり、右に行くほど機能語に近くなる)にあるといえる。

(31) 名詞→語彙接頭辞→形式接頭辞

本稿で考察対象とした日本語名詞の接頭辞化では、いずれも(31)のような意味・用法の拡張がなされている。

6. まとめ

本論文では、日本語の名詞が意味を変化させて接頭辞になる現象について、「くそ」という語を中心に取り上げて分析を行った。分析に先立って日本語の接頭辞について概観し、形式接頭辞、語彙接頭辞という術語を定義することで、従来の研究に見られた日本語接頭辞の揺れについて整理した。そして「くそ」という語の用法について、先に定めた術語を用いて具体例の観察・分析を行った。その結果、「くそ」の名詞用法と接頭辞用法について、両者が比喩による拡張関係にあることを明らかにした。さらに「くそ」と同様に人や物事についてマイナスのニュアンスを示す「馬鹿」「カス」「ゴミ」を取り上げ、それらが「くそ」と同様に接頭辞用法として後接する語の程度を強調する機能を持っていることを明らかにした。さらに文法化の観点から名詞、語彙接頭辞、形式接頭辞が連続した関係にあり、本稿で考察対象とした日本語名詞の接頭辞化がいずれもこの連続関係に沿って意味拡張していることを明らかにした。

注

1. 本論文にて、例文に引かれている下線は筆者によるものである。引用した例文の中で、研究対象となる要素には実線(____)を、その要素が修飾している部分には破線(.....)を引いている。
2. 拘束形態素とは、「他の形態素と結びついて初めて語として用いることができるもの(明解言語学辞典)」のことである。
3. ここでの分類は用法の分類であるため、1つの形態素が2つ以上の分類にまたがることも考えられる。

4. 先に挙げた「片-」では、「片手」「片足」といった派生語全体の意味において、語構成の前項と後項が同程度の比重で意味を担っているため、「片-」を取り除いて「手」「足」とすると、指示するものが明確に変化した。一方ここで挙げた「ド根性」「ぶん殴る」においては、派生語全体の意味について後接する語基である「根性」「殴る」の比重が大きいため、「ド-」「ぶん-」を取り除いても指示対象自体は大きく変化しない。これは、例文(9)や(10)にて、「ド根性」「ぶん殴る」をそれぞれ「根性」「殴る」としても非文にならないことから判断できる。
5. 本研究では基本的に「接頭辞」はある程度意味が定着し、語の生産性を持つものを対象とする。例えば「成田離婚」という新語がある。これは「新婚旅行を機に離婚してしまうこと」を意味する。この場合「成田」は「新婚旅行」という意味を表しているが、この意味で「成田」が語として用いられることはないので、ここで定めた定義に倣うと、この「成田」は語彙接頭辞であるということになる。しかし、「成田」が「新婚旅行」を示す表現はこの「成田離婚」しか存在しない。よってこの場合「成田」は「飛行場がある地名」がメトニミーによって意味拡張した例であると捉え、「成田離婚」は「語基+語基」の複合語であると考えることとする。
6. 先に挙げた「くそ真面目」「くそ早い」について、語全体の意味は〈愚直なほど真面目〉〈程度がはなはだしく、好ましくないほど早い〉であり、それぞれ語構成において前項と後項が同程度の比重で意味を担っている。一方で「くそ美味しい」「くそ度胸」について、語全体の意味は〈とても美味しい〉〈並外れた度胸〉であり、後項が担う意味の比重が大きく、それぞれ「くそ-」を取り除いても指示対象自体は大きく変化しない。
7. 靱山(2010 : 35)では、メタファーについて「2つの事物・概念の何らかの「類似性」に基づいて、本来は一方を表す形式を用いて、他方の事物・概念を表す比喻」と定義している。本稿ではこの定義を援用する。ここでは本来〈大便〉という意味を表す形式「くそ」が、不愉快で好ましくないものであるという類似性によって、〈好ましくない人や物事〉という意味を表す形式として意味拡張したと考えられる。
8. 靱山(2014 : 45)では、シネクドキーについて「ある語(などの表現)が、本来の意味よりも狭い意味あるいは広い意味を表すこと(および、その仕組み)」であると述べている。本稿ではこの定義を援用する。またシネクドキーは、「花見」の「花」で〈桜〉を表すなど、名詞の例が挙げられることが多いが、靱山(2002)ではシネクドキーとして以下の例文を挙げている。

24 知らせを聞いて飛んできました。(靱山(2002 : 73))

この「飛ぶ」は、〈空中を速い速度で移動する〉という特殊な意味から、〈(空中に限らず)

速い速度で移動する」という一般的な意味へのシネクドキーであると説明されている。このように、シネクドキーは名詞の類種関係に限らず、様々な意味の指示範囲の伸縮について説明することができる。本稿で挙げている形式接頭辞「くそ-」の場合、「度が過ぎていて」「好ましくない」という意味を持つ語彙接頭辞「くそ-」が、より広い意味である〈(好ましいかどうかにかかわらず)度が過ぎていること〉を表すようになったという点で、「くそ-」という語がシネクドキーによる拡張によって、本来の意味より広い意味を表すようになった事象であると捉えられる。

参考文献

- 亀井孝他(編)(1996)『言語学大辞典 第6巻 術語編』,三省堂.
 北原保雄(編)(2000)『日本国語大辞典 第二版』,小学館.
 北原保雄(編)(2010)『明鏡国語辞典 第二版』,大修館書店.
 斎藤倫明(2014)「接辞」日本語文法学会『日本語文法事典』,大修館書店.
 長屋尚典(2015)「接辞」斎藤純男・田口善久・西村義樹(編)『明解言語学辞典』,三省堂.
 竝木崇康(2009)『単語の構造と秘密 一日英語の造語法を探る一』,開拓社.
 三宅知宏(2005)「現代日本語における文法化—内容語と機能語の連続性をめぐって—」『日本語の研究』1巻3号, pp.61-76.
 榎山洋介(2002)『認知言語学のしくみ』,研究社.
 榎山洋介(2010)『認知言語学入門』,研究社.
 榎山洋介(2014)『日本語研究のための認知言語学』,研究社.

例文出典

- 「現代日本語書きことば均衡コーパス(BCCWJ)」中納言 (<https://chunagon.ninjal.ac.jp>)
 Twitter (<https://twitter.com>)
 Yahoo! JAPAN (<https://www.yahoo.co.jp/>)